

森林管理署長が語る！

天竜森林管理署 岩田清人

はじめに

このコーナーに天竜森林管理署が登場するのは7年ぶりになります。署の概要や主な取組などにつきましては、前回（平成29年9月）触れていますので、今回は天竜地域の国有林を中心とした歴史とともに、最近の取組について紹介します。

天竜地域の地形等

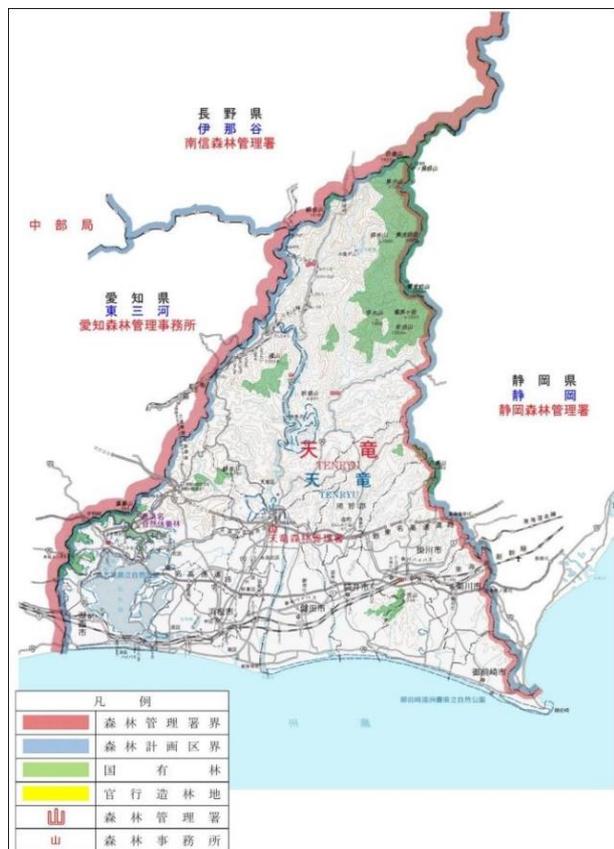
天竜森林管理署は静岡県西部に位置しており、国有林は、浜松市、掛川市、袋井市、湖西市及び森町に所在しています。管轄区域の北部は南アルプス赤石山脈系につながる山岳地帯にあり、急峻で起伏が著しい地形を呈しており、急峻な山地を侵食する河川は、天竜川のように急流となり、山地を侵食しています。

また、西南日本を二分する大断層の中央構造線が走るもろい地質構造になっており、このため、山の斜面で大規模な崩壊や地すべりが起きています。

管轄区域の中部から南部へは、海拔の低下とともに小起伏となり、南部は丘陵地帯を形成しています。

江戸時代、天竜川の川筋は定まらず、洪水を繰り返すため、「あばれ天竜」と呼ばれ、恐れられていました。天竜川的作用によって、天竜川上流の土砂が当時の海底へ流入・堆積し、浜名湖や日本三大砂丘に挙げられる中田島砂丘が形づくられました。

当署管内の主な水系である天竜川の主な支流には、水窪川、気田川等があります。また、愛知県との県境にある三ヶ日地域では、弓張山地を分水嶺として静岡県側のすべての河川が浜名湖に注いでいます。国有林は、これら水系の源流部に位置しており、良質な水を育む水源地として重要な役割を果たしています。



国有林から浜名湖を望む

徳川幕府時代（江戸時代）

浜松市の北部、天竜区に広がる通称“天竜美林”は、奈良県の吉野、三重県の尾鷲と並び「日本三大人工林」の一つに数えられています。

天竜の林業の始まりについては、室町時代の文明年間（1469～1487年）に春野町秋葉神社の境内林として植林記録が残っているとのこと。その後、元禄9年（1696年）、水窪町・山住神社の宮司が熊野からスギの苗木3万本を持ち帰り植林したことで本格的な林業が始まったといわれています。

江戸時代、現在の天竜署が管理する国有林の大部分は、幕府が直接管理経営を行う森林でした。当初は厳しい伐採規制により保護されていましたが、次第に木材需要が増大してくるにつれて、伐採も進められるとともに造林も進められるようになりました。「東京営林局100年史」によれば、現在の浜松市天竜区水窪町に所在する門桁、白倉山、戸中山の国有林について、宝暦11年（1761年）に作成された「御林木数品訳帳」に、門桁御林、白倉山御林、戸中山御林との記載があるとのこと。



天竜の森林

幕府は明和元年（1764年）に植林奨励策を積極的に打ち出し始め、この地域の御林からは、駿府城本丸御用材などとして、伐採搬出された記録があるとのこと。

明治初期

幕府直轄林は、明治新政府に帰属することとなり、官林と称することになりました。

官林の管理は、当初は静岡県に委任されていましたが、中央の行政機関が整っていくことに従い、徐々に国の直轄に移され、内務省に山林局が創設されてからは山林局が管理しました（のちに山林局は農商務省に移管）。また、地方の出先機関が整備されていく中で、明治19年（1886年）に静岡大林区署が設置されました。

明治9年（1876年）には、国が直接林業経営としての伐採を行う「官行斫伐（かんこうしゃくばつ）事業」が、伐木の実行によって林相改良を図ろうという理念のもと、門桁山において行われました。

なお、官行斫伐事業は、門桁山のほかは、木曾、秋田、青森で行われています。

門桁山での事業は、明治13年（1880年）には廃止され、長期継続的なものではありませんでしたが、大規模な官公事業として行われた最初のものであり、のちの国有林における製品生産事業の第一ページとなりました。

門桁山における斫伐事業における伐木材積は一万五千尺 \times （約5,100立方メートル）でした。

御料林への編入

皇室財産確立のため、明治22年(1889年)に天竜川流域などの官林が御料林に編入され、静岡県西部の官林は、宮内省御料局静岡支庁が管理することになり、現在の浜名区中心部に三方出張所(のちに当時の浜松町に移転し浜松出張所に改称)が設置され、同時に現在の周智郡森町に森出張所が設置されました。出張所は、当時の国有林の小林区署に相当し、のちの営林署(現在の森林管理署)の前身です。

明治42年(1909年)には、森、浜松両出張所の一部を合併して気田出張所が、森出張所の残部と静岡出張所の一部(現在の島田市)を合併して掛川出張所が、それぞれ新設されました(静岡出張所は千頭出張所に改称)。

その後、御料局は帝室林野管理局を経て帝室林野局へと変わり、昭和16年(1941年)には、気田、浜松両出張所の一部を合併して、水窪出張所が新設されました。なお、浜松出張所は第二次世界大戦の空襲で庁舎が焼失し、三ヶ日町に移転しました。



御料時代の掛川出張所



御料時代の林野巡視員
[通信用に鳩を携帯していた]
(袋井・三沢山国有林)

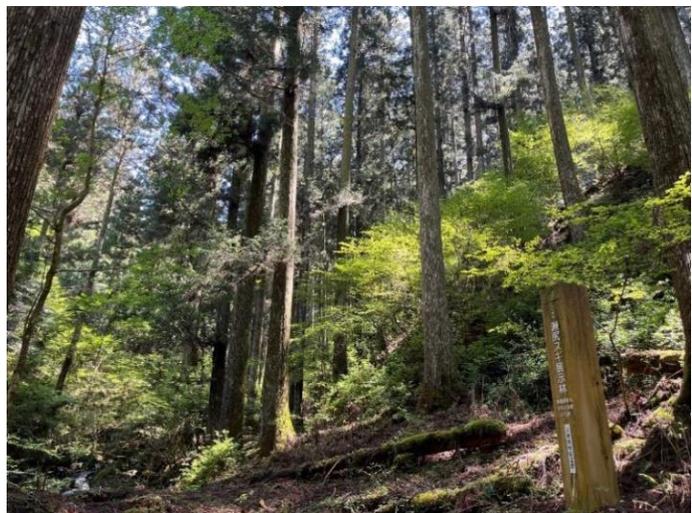
金原明善翁による植林事業

先に述べたとおり、天竜川は洪水を繰り返し、この地域の人々を苦しめていました。

旗本松平家の代官の家に生まれ、幼いころから度重なる天竜川の水害による惨禍を体験した金原明善(きんばらめいぜん)翁は、天竜川水系の治山治水と開発こそ、この地域の人たちのしあわせを高める道であると確信し、自分の資産すべてを投じ、天竜川治水工事に取り組みました。

しかし、水害は容易に収まらず、明善翁はその原因に上流地域での治山の遅れがあると考え、「河を治るは、山を治るにあり」として、瀬尻官林及びその周囲において、自費を投じ、山林局の許可のもとに、明治19年(1886年)から同31年(1898年)にかけて2,000haにおよぶ植林事業を行い、植付総本数は292万本余りとされています。

この明善翁の実践が刺激となっ



瀬尻スギ展示林(明治21年植栽)

て、一般の人々も造林を積極的に行うようになり、今日の天竜美林ができあがったといわれています。

明善翁の植林地は御料局へ返納されましたが、現在の瀬尻国有林のほとんどは翁の事業を引き継いだことになり、翁の植えた森林の一部は、今も展示林として保残されています。

営林署から森林管理署へ

昭和 22 年（1947 年）の林政統一により、御料林は農林省（当時）に移管され、御料局の出張所はそれぞれ、掛川営林署、気田営林署、水窪営林署、三ヶ日営林署となりました（その後、三ヶ日営林署の庁舎が浜松市和地山町に移転し、浜松営林署と改称）。

その後、昭和 54 年（1979 年）に掛川営林署が浜松営林署に統合され、平成 10 年（1998 年）には水窪営林署が水窪森林管理センターに改組されました。



流送風景（昭和 7 年ころ）

平成 11 年（1999 年）3 月、浜松営林署、気田営林署及び水窪森林管理センターが統合されて天竜森林管理署となり、平成 13 年（2001 年）12 月に天竜森林管理署庁舎を浜松市浜名区中瀬（当時は浜北市中瀬）に移転しました。

森林鉄道

旧気田営林署及び旧水窪営林署の歴史を語る上で忘れられないのが森林鉄道です。今日では、森林鉄道はまったく姿を消していますが、昭和 20 年代から 40 年代前半あたりまでは木材輸送の中心は森林鉄道でした。

多くの森林鉄道は、急峻な山腹を切り開いて建設され、木造の橋梁も多く、単線でした。森林鉄道は地元住民の交通機関としても親しまれていました。

気田森林鉄道

地元の森林組合によって昭和 8 年に着工、昭和 10 年に 4,120 メートル竣工。その後、発電所・ダム工事運搬用及び御料林に至る延長工事を行い、昭和 15 年には延長 30,134 メートルとなりました。

この森林鉄道は、沿線に点在する集落とのかかわりも深く、生活物資輸送のほとんどは森林鉄道に依存しており、住民も毎日利用していました。

戦後、事業の奥地への進行に伴い、延長工事を行い、総延長 33,034 メートルとなり、また、昭和 20 年には本線から分岐する海老沢支線 4,000 メートルの工事が行われました。

しかし、昭和 34 年になると、沿線の人たちにも親しまれた森林鉄道は、自動車道へと改良されることになりました。



仙郷橋で撮影された気田森林鉄道 1952年4月

気田森林鉄道（昭和 27 年）

熊切森林鉄道

気田出張所が直接建設したもので、昭和 13 年に着工し、昭和 14 年に延長 5,537 メートルが竣工しました。

戦時中、いったんは軌条が取りはずされ牛馬道に格下げされましたが、昭和 25 年にふたたび軌条を敷設するとともに新設延長工事も行われ、総延長 6,697 メートルの森林鉄道となりました。

昭和 41 年に至り、自動車道への改良に着手し、昭和 43 年に自動車道として生まれ変わりました。

水窪森林鉄道

気田出張所（昭和 16 年に分離し水窪出張所となる）が昭和 15 年に着工し、昭和 17 年までに 18,220 メートルが竣工し、天然林の大径材の搬出が開始されました。

戦後、新設延長工事が順次行われ、昭和 26 年に総延長 21,310 メートルの水窪森林鉄道が完成しました。

最盛期には、10 両を連結し、1 日 2 往復の運材を行っていましたが、新しい時代の到来とともに、自動車道として改良することとなり、昭和 39 年から着工して、昭和 43 年に自動車道として生まれ変わりました。



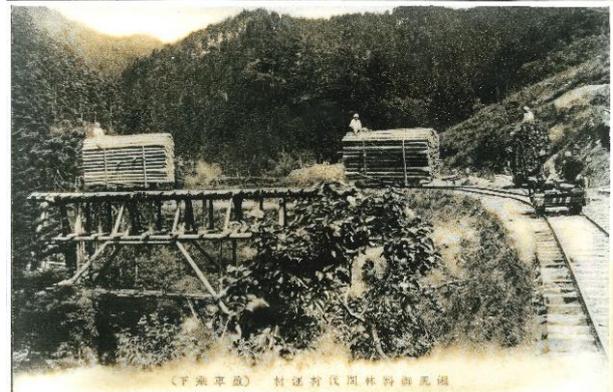
水窪森林鉄道 左：運材列車（山王狭） 右：山王狭鉄橋
（S30 年初期）

瀬尻森林鉄道

気田出張所によって昭和 3 年に着工され、昭和 4 年 13,506 メートルの森林鉄道が完成しました。森林鉄道から貯木場までは高低差があったことから、傾斜面にレールを引いて木材を運ぶインクライン（ケーブルカーのようにワイヤーロープで貨車を昇降させるもの）も作られました。昭和 16 年には水窪出張所の管理することとなりました。

昭和 32 年瀬尻併用林道の開設とともに森林鉄道の自動車道への切替えがはじまり、昭和 36 年度にその切替えが完了しました。

また、昭和 23 年には新搬出ルートとして新開線を新設することとなり、昭和 24 年までに 1,500 メートルが完成しましたが、その後自動車道へ切替えられることとなり、昭和 38 年には改良工事が終了しました。



瀬尻御料林間伐木運材

奥浜名自然休養林

静岡県西部に位置する浜名湖は、太平洋の海水が流入する汽水湖であり、ウナギやスッポンの養殖でも有名です。

その浜名湖に流れ込む河川の源流となっている湖北の国有林について、昭和 48 年（1973 年）に「奥浜名自然休養林」が設定されました。

富幕山（563 メートル）を中心に標高 70～563 メートルの緩やかな丘陵地で、約 1,100 ヘクタールの国有林が浜名湖の背景に屏風状に連なっています。

奥浜名自然休養林を擁する奥浜名湖エリアは「遠州の奥座敷」ともいわれ、由緒ある寺院や庭園、史跡など歴史文化資源が豊富に存在し、探訪することができます。



奥浜名自然休養林 左：歩道入口（気賀第一国有林）

右：パラグライダー施設（大谷国有林）

森林内にはハイキングコースも整備され、山歩きに最適な温暖な気候と全国トップクラスの年間日照時間により、四季を通して様々な山の姿を楽しむことができ、浜名湖や浜松市街、みかん畑と田園風景などの美しい眺望や豊かな自然を楽しむこともできます。また、コース脇には、眺望の素晴らしいパラグライダーのテイクオフ場もあり、スカイスポーツを楽しむこともできます。

最近の取組み① 森林認証

一般に天竜林業地とは、静岡県浜松市の天竜川本流及び支流の気田川、水窪川等の流域を指しています。

浜松市では、平成 22 年（2010 年）に県・市・森林組合等で協議会を立ち上げ、天竜区と浜名区（当時：北区）引佐地域の森林において、世界的な森林認証である「FSC 森林認証」を取得しました。認証面積は年々拡大し、現在は約 49,700 ヘクタールとなっています。

国有林では、地元要望を受け天竜材ブランド化・販路拡大を支援するため、平成 25 年及び令和 2 年に合わせて約 4,900 ヘクタールを認証取得し、国有林サイトとして参画しています。



FSC 認証林（瀬尻国有林）

最近の取組み② エリートツリー・特定苗

天竜流域の森林においても、他の地域と同様、多くの人工林は利用期を迎え、充実した森林資源を利用すると同時に計画的に再造林すべき段階にあります。造林・保育コスト、特に造林初期（地拵え・植付け・下刈り）のコストをいかにして縮減するかが喫緊の課題となっています。

天竜署では、成長に優れた苗木を植栽するとともに、静岡県森林・林業研究センターなどと連携して試験地を設定し、第 3 世代エリートツリーの選抜に向けた成長状況の検証を行っています。

また、取組の成果を民有林に普及するため現地検討会等を開催しています。



次代検定林（エリートツリー選抜試験地）

エリートツリー：各地の山で選抜された精英樹（第 1 世代）の中でも、特に優れたものを交配した苗木の中から選ばれた、第 2 世代以降のもの

※初期成長に優れ、従来の苗を植栽する場合と比べて、下刈期間を短縮できる可能性があり、材質や通直性にも優れている

特定母樹：森林の CO2 吸収能力を高めるため、農林水産大臣が特に成長等に優れ花粉の量が一般的なスギ・ヒノキに比べて概ね半分以下のものを特定母樹として指定

※エリートツリーのうち一定の基準を満たすものの中から指定される



特定苗（植栽してから2年を経過）



成長に優れた苗木の活用等に関する
現地検討会

最近の取組み③ 早生樹の可能性について

国有林では、昭和30年代に木材の増産を目的として、テーダマツ等の早生樹が造林に適しているかを検証するため各地で植栽されましたが、多くは失敗しました。

しかし、天竜森林管理署管内に植栽されたテーダマツやスラッシュマツは、一部は風に倒されたりしていますが、多くは立派な森林となっています。

テーダマツやスラッシュマツは成長速度が非常に早く、伐採できる大きさになるまで、スギやヒノキだと60年以上かかるところ、20～30年程度で伐採できる大きさになると言われています。

最近ではテーダマツ・スラッシュマツを合板に利用するための研究も進められています。

また、テーダマツを伐採した跡地では、自然に落ちた種から芽が出た若木が多数見られます。これらの若木が樹木として成長すれば、植栽コストの削減につながります。

今後も研究機関や関係者と連携・協力しながら、テーダマツ等早生樹の可能性について探っていきます。



テーダマツ



テーダマツの林



テーダマツの伐採跡地

（自然に落ちた種から芽が出た若木が多数見られる）